

「帰還兵はなぜ自殺するのか」

(著者：デイヴィッド・フィンケル) <評者：北大准教授・中島岳志>

(亜紀書房・2484円)

毎日新聞 15.5.3

米国のリアルな現実

2003年に始まったイラク戦争。自衛隊のイラク派遣は一人の犠牲者も出すことなく、任務を終えたとされる。しかし、NHKの調べでは、28人もの帰還隊員が自殺していたことが判明している。本当に犠牲者が出なかったと言えるのか。なぜ、帰還兵は心の病に苦しめられるのか。

本書は主にイラク戦争に従事したアメリカ人兵士を取り上げる。イラク・アフガニスタンに派遣され、帰還したアメリカ人は約200万人。そのうち20～30%が精神的・心理的障害に悩まされているという。彼らは鬱、不安、悪夢、人格変化、記憶障害などを抱え、苦悶(くもん)する。そして日々、自殺者が出続けている。

彼らは本当の苦悩を、なかなか家族に打ち明けられない。弱い人間だと思われたくないからだ。戦場での体験も話せない。敵の命を奪い、子供たちを傷つけた。いまでも繰り返し悪夢を見る。「結婚相手が、人を殺す夢を見ているなんて知ってほしくない」。「話したら嫌われるに決まっている」。だから、話せない。そして、悩みを抱え続け、自殺の道を歩む。人格が壊れていく。

イラクの戦場に派遣されたアダムは現場で精神に支障をきたし、帰国した。アダムは子供に恵まれた。しかし、生後4日目の息子を床に落としてしまう。幸い赤ん坊の命に別条はなかったものの、妻は動転し、彼は謝り続けた。「ごめん。今度も、ごめん」。彼は「だれもが魅力を感じ、応援したくなる男で、頭が切れて、親切で、高潔で、勘がいい男だった」。しかし、帰国した彼は別人。妻のサスキアは言う。「あの人はいまでもいい人よ」「ただ、壊れてしまっただけ」

妻は懸命に夫の病と向き合う。何とか元の平穏な暮らしを取り戻したいと考え、治療に付き添う。しかし、夫は元に戻らない。突然、怒りだし、時に暴力をふるう。いらいらしてじっとしてられない。物忘れが激しい。経済的余裕もない。なのに、夫は無駄遣いをくり返す。

すると、妻の心にも余裕がなくなっていく。夫が病気になるのは分かっている。どんなことにも耐えようと心に誓った。けど「もうやめて」と叫びたくなる。「いいかげん元気になって、しゃきっとしてよ」

アダムを病院に連れて行くため自動車を運転していると、イライラが頂点に達する。前の車がブレーキを踏むと怒鳴り散らす。トラックが前に入り込んでくると「ばかやろう」と悪態をつく。前の車がノロノロ運転をしているとアクセルを踏み込み、「どきなさいよ！」と叫ぶ。

二人は頻りに喧嘩(けんか)をする。アダムは暴力的になり、サスキアの顔を殴る。ドアを破壊し、ベッドのヘッドボードを殴りつけ涙を流す。家族は耐えるしかない。

時にアダムは拳銃を取り出す。そして、自分に銃口を突きつけ、「このいまましい引き金を引けよ」とわめく。サスキアはいっそのこと、引き金を引いてしまおうかと思う。夫を殺し、何もかも終わりにしてしまいたいと思う。しかし、そうはせず踵(きびす)を返して歩き去る。必死で息を吸い込もうとしている姿を見られないように、彼に背中を向けて立つ。アメリカのリアルな現実だ。

いま日本の安全保障体制が劇的に変わろうとしている。すでに28人の自殺者を出し、多くの帰還隊員が心の病に苦しむ中、同じ悲劇を拡大させようとしている。

本書は、必読の書である。わたしたちの日常はいかなる変化にさらされようとしているのか。日本の未来が描かれていると思った方がいい。(古屋美登里訳)